

---

# 時の契約者

龍川歌風

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

時の契約者

### 【Nコード】

N4772B

### 【作者名】

龍川歌風

### 【あらすじ】

突然“私”の前に現われた黒い男。彼は“私”にある幻を見せた…。

「さあ、<時>は満ちた。まずは契約内容の確認といこうか・・・」  
突如現われた黒い男。彼は“私”の額に手をかざした。

大切な人を埋葬した直後のことだった。

景色が見えた。

姫らしき娘と兵士が、馬を駆って逃げてゆく。

周りは火と矢と屍の海。どうやら戦たたかが起きたようだ。

「もう良いのです。貴方は十分私を守ってくれました。貴方だけでもお逃げください」

「いいえ姫、私は最後まで貴女を守ります!」

馬を御しながら、兵士は叫んだ。

「兵士といえども、自分の身を第一に考えても良いはずですよ。お願いです、私を降ろして下さい!」

「なりませぬ!」

「なぜです!?!」

「貴女は私を助けてくれた。貴女のおかげで私は兵士になれた。貴女は一人ぼっちだった私のそばにいてくれた……っ！私にとつて、貴女は命よりも大切な存在なんです！！」

兵士は声を張り上げた。

しかしその直後、馬の足を射られ、二人は転倒した。無数の矢が二人を襲う。

「姫、姫、ご無事ですか……？ ああ、結局私は、貴女をお守りすることができなかつたというのか……？ そんなの嫌だっ！！」

口の端から血をしたたらせ、兵士は吼えた。

「お願いです、大いなる神々や精霊だなんて言いません。たとえ悪魔だつてかまいませんから……！だから、だからどうか……誰でもいいから……私の愛する人を……たす……」

け……」

兵士の意識は闇へと落ちていった。

『救いたいか？その者を』

「!？」

目を開けると、一人の男が立っていた。闇をまといし黒き存在。

そしてそれとは対称的な、真っ白な空間。矢も悲鳴も血のにおいも無い、完全なる静寂……。

「貴方は……？」

『我は闇に住まう者。呼び声にいざなわれ、ここへ来た。お前の願いを叶えてやろう。我と契約し、その代償を払うというのならばな……』

「代償……？」

『そうだ。お前に課する代償は、お前自身の<時>。さすれば我はお前の僕ぼくとなり、お前の<時>は我のものとなる。どうだ？』

「……いいでしょう。私の<時>を差し上げます。だからその代わりに、私の大切な人を……助けてください！」

景色が変わった。

「お父さん、こっちこっちー！」

袋いっぱいパンを抱えて、十前後の少女が走ってゆく。そしてそんな彼女を見守る、父親らしき男の姿。

「ごく普通の村の、ごく普通の風景。たわいのない会話。ささやかな幸せ……。」

少女は教会の前まで来ると、立ち止まって向かいの山々を一望した。

「お山が赤や黄色に染まっててキレイだね。まるでドレスを着てるみた・・・」

「魔物だ、魔物が攻めてきたぞー!!!」

突然の叫び声。次々と上がる悲鳴。押し寄せる人の波。襲い来る、黒く巨大な生き物たち。

「早くこっちへ来なさい!」

父親が少女を呼ぶ。しかし逃げゆく人々に突き飛ばされ、少女は倒れこんだ。

「お父さんがそっちへ行くから、おとなしく待って」

言い終わらないうちに、荒れ狂う魔物が少女のいる教会を叩き壊した。

「!!!!!!」  
「姫っっ!!!!!!」

男はガレキに埋まった少女を かつての主君を 死に  
物狂いで探した。

ガレキをどけると、少女は頭から血を流し、ぐったりとしていた。

「起きるんだ!起きてください・・・・・・姫っ!!!」

しかし少女はピクリとも動かない。

「そんな・・・私はまた、貴女を守れなかった・・・。今度こそ、今度こそ・・・。貴女と共に生きられると思ったのに・・・。っ！こんな・・・こんなことって・・・」

『案ずるな』

男が振り返ると、いつのまにか背後に黒い男が立っていた。

そしてあの時と同じ、真っ白な空間　　・・・。

「あな・・・たは・・・」

『我との契約を解除せんかぎり、その娘の魂が、身体から離れることとはない。身体の時>が戻り、記憶を失い、また甦る・・・』

「本当に・・・!?!?」

『無論だ。わかつたらとつとと逃げることだな。首を落とされると、魂が離れていってしまうぞ』

そう言つや否や、黒い男の姿が掻き消えた。同時に、あの真っ白な空間も消えていた。

男は少女を抱えて走り出した。

## 時の契約者

また景色が変わった。

今度は先ほどの少女とは違い、あの姫と同じ年頃の娘であった。顔色が悪く、どうやら病に臥しているようだ。そしてその隣には、彼女を看病する一人の中年の男。

少しずつ、彼女の呼吸が小さくなってゆく。男はただ黙ってそれを見つめるだけ。

娘の<時>が止まった。そして再び、巻き戻る……………

花火のように現われては消える幻影<sup>ヒジヨ</sup>。

小さな小さな少女。それとは逆に、年老いていく男の姿。

少女は毒蛇に噛まれ、死んだ。それでも再び動き出す彼女の<時>。

終わることのない生、しかし救うことの出来ぬ御魂<sup>みたま</sup>……………

「次でもう……………終わりにしよう……………」

男は静かに呟いた。

今、“私”はあの人の眠る墓の前に立っている。長い<時>を共に過ごした、大切な人の……………

『さて、そろそろ正式に貴様の<時>を頂こうか』

黒い男は手を下ろして言った。

『お前は我に自身の〈時〉を差し出し、我が主となった』

「……はい」

『ゆえにお前はこれから、我と共に生きねばならん。いいな？』

「……はい」

“私”は素直に頷いた。目的を果たした今、もはや恐れるものなど何もない。

『……いい返事だな、

姫君』

男は冷たい笑みを浮かべた。

『……“私”はもう、姫などではありません。小さな農村で、優しい父に育てられた、ごく普通の娘です。      全てを知るまでは……』

そう、この悪魔と契約したのは、この“私”。愛する人を救うために、自らの〈時〉を差し出した愚か者は、この、“私”……。

『あの時、我はあの兵士に呼ばれて来てみたものの、奴は我と契約する前に息絶えてしまった。しかし【運良く】入れ違いに目覚めたお前は我と契約し、奴は甦った……』

男は嬉しそうに続けた。

『その時の奴の顔は今でも覚えているぞ。自分を助けるために赤子へと変貌したお前を見た時、発狂せんばかりの勢いで泣き叫んでいた。ましてや「次で終わりにする」と言っておきながら、自分が先に逝ってしまうとは・・・クツ、実に哀れな男だな』

男はくつくつと笑った。さもおかしくてたまらないといった感じだ。

この氷のような男には、きつとわからないだろう。誰かを愛することも、その人の為ならく時<sup>いひ</sup>だって捧げられるというく想いも・・・。

とんだ茶番に過ぎぬに違いない。

しかしそれはある意味正しいのかもしれない。“私”は目的のためなら手段を選ばなかった。禁忌を犯した。愛する人を苦しめた。

“私”はく人くすらも捨て去った、ただただ愚かな存在なのだから・・・。

『・・・では行くとするか、我が主よ。言っておくが、自決などということは考えるなよ？そのようなこと、我は絶対に認めんからな』  
「く心配なさらず。そのようなこと、決して致しませんわ」

この男の心意がどうであろうと、願いを叶えてくれたのは事実だ。約束を違えるわけにはいかない。

『フ、いい心構えだ。・・・ではどこへ行きたい？地の果てまでとてついでに行くぞ』

「そうですか・・・では、“私”は世界中を旅して回りたいのです」  
『ほう、なぜ？』

「いずれ生まれ変わるであろうあの人に、会いに行きたいのです」  
男の表情が歪んだ。

『あの兵士に？愚かな・・・いつ、どこに生まれ落ちるかわからぬのだぞ？たとえ見つかったとしても、貴様らは決して結ばれない。貴様は不老不死の化け物なのだからな！』

男の言葉が“私”の胸へと突き刺さる。

本当はずっと前から気づいていた。自分が普通ではないと。

“私”はもう二十五年もの歳月を生きている。それなのに、見た目はいつまで経っても  
あの 姫の年頃ころのまま・・・。

「わかっております。禁忌を犯したものが、あの人を幸せに出来るはずがありませんもの。だからせめて、あの方が幸せかどうか、“私”以外の大切な人を見つけられたかどうか、知りたいのです」

『・・・いいだろう』

男は静かに頷いた。

こうして、ようやく“我”は手に入れたのだ。共に永遠の<時>を歩む相手を。短いはずの六十余年は、あまりにも長かった……。

しかし<心>までは手に入らなかった。

やっとあの忌々しい兵士が消えたというのに、この娘の<心>はずっと、あの男に傾いたまま……。

きつとこの娘にはわからぬだろう。“我”のこの<心>も、この<想い>も、永遠に。

そして二人は永久とわの<時>を歩む  
……。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4772b/>

---

時の契約者

2008年8月29日18時25分発行